

東急不動産ホールディングス株式会社

“リニアチェーンに魅力を感じ”導入。
ServiceNowとの連携による静的+動的IT資産管理に着手。

東急不動産ホールディングス株式会社(以下、東急不動産HD)は、Windows10のアップデートを効率的に行うことを目的にタニウムを導入。当初3000台で利用を開始し、現在に至ってはグループの約6割となる1万6000台のPCに展開している。さらなる活用を推し進めるべく、Tanium Assetを使ってネットワーク上にあるPCの最新状況を把握し、ServiceNowで管理するIT資産と突き合わせることで、よりタイムリーな資産管理を実現しようとしている。

3000台からスタートし、 1万6000台へと拡大

東急不動産HDは、東急不動産、東急コミュニティー、東急リハビリ、東急ハンズ、東急住宅リース、学生情報センターの主要6社を中心に多様な事業を展開する純粋持ち株会社だ。2021年5月に発表した2030年に向けた長期ビジョン「GROUP VISION 2030」では、「魅力あふれる多彩なライフスタイルの創造を通じて、だれもが自分らしく、いきいきと輝ける未来をつくる」ことを目指すことがうたわれている。

同社は、独立した企業としてそれぞれの文化を培ってきた企業をたばねる存在だ。IT戦略も各社各様で、インフラもアプリケーションも独自のものを使用していた。ただ、うまく共通化することができればコストは下がる。共通するものはHDとしてサポートすると全体最適を図れる。グループIT戦略部は、HDの設立以来、グループ共通セキュリティポリシーの策定などを主導し、ネットワークの統合やPCのグループ一括調達など情報セキュリティ面のみではなく、コスト面でも貢献してきた。

ITの運用管理業務も、可能な部分から徐々にHDへ移行している。2017年、グループのすべてのPCをWindows 10に切り替えるにあたって、パッチファイルが旧来のWindowsより肥大化していることが課題になった。

グループIT戦略部 ITインフラ企画グループ グループリーダー 課長 権泰浩氏は、「どうにかならないものかと考えていたところに出会ったのがタニウムのリニアチェーンで

した。専用に狭い帯域を確保してネットワーク環境を逼迫させず、拠点に向けてファイルを配布する技術です」と話す。「本社と横浜支店を結んで4GBのファイルでテストをしてみたところ、問題なく配り終えることができました。これは使えると採用を決めました」。

グループIT戦略部 ITインフラ企画グループ ITサービス企画チーム チームリーダー 本保 亮祐氏は、「低速回線環境でのテストも行いました。何かあったら駆けつけられるように、自宅の近くにあるマンション販売所への配布テストをしてみると、こちらも結果は良好でした」と振り返る。当初は3000ライセンスの契約だったが、グループを構成する各社へと順次展開し、現在は1万6000台のPCをタニウムでセキュアに管理できる状態になった。

「HD全体のITインフラ管理という意味において、環境を寄せて行くことはセキュリティと効率化の両面で有効です。大きなファイルを配布したいときに、DVDを使って物理的に対応する必要はなくなりました。同時に、セキュリティも向上します。予算がタイトな中でも各社が“HDに任せるのでタニウムでやってほしい”と言ってくれているのはうれしいですね」(本保氏)

PCの最新状態から出社率を判定

同社はWindows 10へのアップグレードに伴いタニウムを導入したため、タニウム採用前後の業務量やネットワーク負荷、パッチ配布の安定性などの比較はしていない。それでも、導入範囲を拡大しているのは、これまで大きなトラブルなく、着実に運用を続けられている



東急不動産ホールディングス

企業プロフィール

1918年に創業した田園都市株式会社を母体として、東京急行電鉄株式会社から不動産部門が分離独立する形で1953年に設立された東急不動産株式会社。2013年には、グループ経営基盤の革新による経営の機動性・効率性向上を目的に、純粋持株会社である東急不動産ホールディングス株式会社を設立し、東急不動産、東急コミュニティー、東急リハビリ、東急ハンズ、東急住宅リース、学生情報センターの主要6社を中心に、多様な事業を展開しています。2021年5月には、2030年に向けた長期ビジョン「GROUP VISION 2030」を発表しました。東急不動産ホールディングスがめざす価値創造は、魅力あふれる多彩なライフスタイルの創造を通じて、誰もが自分らしく、いきいきと輝ける未来をつくることです。グループの強みを活かして、ありたい姿を実現し、サステナブルな成長をめざしています。

導入製品

Tanium Core
Tanium Patch
Tanium Asset

導入効果

100%近いパッチ配布成功率を維持。ネットワーク上にあるPCから、リソース情報、インストール済みソフトウェア、ログインユーザー、最終利用日などの情報を瞬時に取得できる特長を生かし、ServiceNowによる静的なIT資産管理との連携で、「1か月以上利用されていないPCを返却してもらう」、「契約するソフトウェアライセンス数を使用実態に適したものにすする」などの成果も見込む。



ことへの信頼があるためだろう。実際に、Windows 7のころに使っていたWSUS (Windows Server Update Services) ではパッチ配布成功率が90%程度だったが、タニウム導入後は100%近い数字を維持している。

タニウムにより、PCの最新状態を取得できることは、経済産業省からの依頼を受けてコロナ禍での出勤率を把握することにも役立った。すべての社員にPCを貸与しているため、そのPCをどこで使っているかがわかれば出勤率を出せる。そこで、PCのIPアドレスが社内のもを出社と判断して判定してみたところ、良好な結果を得ることができた。

「それまでは総務部の若手が各階を回って目視していたそうで、結果は目視と合っていたようです。おかげで目視をやめることができました。小さなDXが実現したことになりますね(笑)」(権氏)

IT資産管理をより高度なものへ

現在取り組んでいるのは、IT資産管理をより

“ 今後、グループ各社へのさらなる展開や新しいテクノロジーへのチャレンジなど、さまざまな領域に取り組まなければなりません。タニウムはさまざまな場面でフィットする機能や使い方がありそうです。

グループIT戦略部 ITインフラ企画グループ グループリーダー 課長 権泰浩氏

高度にするためのタニウムの活用だ。同社はServiceNowを使って利用者情報を含む静的な情報としてIT資産を管理している。一方、タニウムを使えば、ネットワーク上にあるPCから、リソース情報、インストール済みソフトウェア、ログインユーザー、最終利用日などの情報を瞬時に取得できる。これらを組み合わせることで、たとえば「1か月以上利用されていないPCを返却してもらう」、「契約するソフトウェアライセンス数を使用実態に適したものにする」などの成果を期待できる。

現在、この仕組みを業務に適用するための準備を進めており、本格的なスタートは2022年度になる見込みだ。また、同社がサポートするグループ企業各社のITインフラには、タニウムの機能を適用することで効率化を高め、

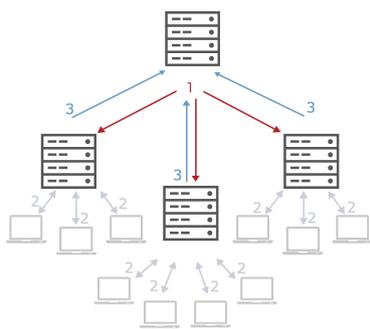
セキュリティを向上できる領域があるはずだと見ている。それらについても精査し、潜在的なITリスクを排除することを含め、さらなるタニウム活用を図っていく。海外拠点への展開も検討中だ。

権氏は、「近い将来、ゼロトラストネットワークを実現することを視野に、そのアーキテクチャのあるべき姿について考えているところです。グループ各社へのさらなる展開や新しいテクノロジーへのチャレンジなど、さまざまな領域に取り組まなければなりません。タニウムはさまざまな場面でフィットする機能や使い方がありそうです」と話してくれた。

タニウムのリアルタイム・エンドポイント・プラットフォームの特長と違い

他社とタニウムの決定的なアーキテクチャの違いとは

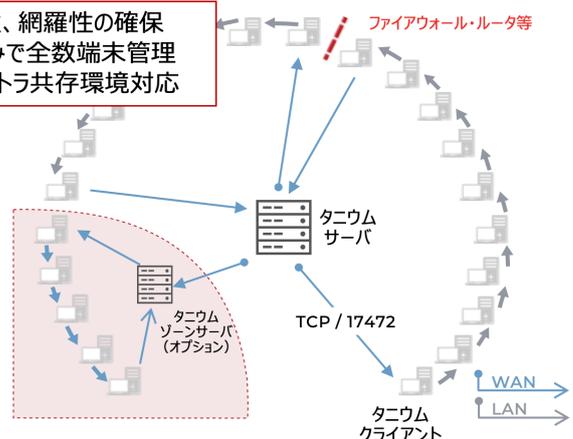
他社のアーキテクチャ ハブ & スポークモデル



- ・膨大な中継、分散サーバー
- ・通信トラフィックの枯渇
- ・リアルタイム性、網羅性の欠如

特許技術を有するタニウムのみが実現可能なアーキテクチャ リニアチェーン・アーキテクチャ

- ・リアルタイム性、網羅性の確保
- ・サーバ1式のみで全数端末管理
- ・オンプレ・ゼロトラ共存環境対応



お問い合わせ



タニウム合同会社
〒141-0021 東京都品川区上大崎3-5-11 目黒ヴィラガーデン5F

<https://www.tanium.jp>
jpmarketing@tanium.com